

## 第3章

### 喜多方市の

### 歴史文化の特徴



## 1. 歴史文化の特徴の設定の目的

歴史文化とは、地域固有の風土の下、先人によって生み出され、はぐくまれ、時には変容しながら現代まで伝えられてきた知恵・経験・活動等の成果やその成果が存在する環境を総体的に把握した概念です。

この概念に基づいて、本市固有の自然的・地理的環境、社会的状況、歴史的背景、歴史文化資源やそれに関わる取組等を総体的に俯瞰することによって見出されるものが、本市の「歴史文化の特徴」です。

歴史文化の特徴を表す一要素が歴史文化資源であり、それらを継承していくことで、その特徴も後世に伝えられていきます。また、歴史文化の特徴は、本市の歴史文化資源に関わる保存・活用の取組の検討や、その実施の際に目指すべき方向性を示す軸にもなります。

この特徴を軸に本計画を作成することによって、本市の歴史文化資源の持つ新たな価値を明らかにできるようになります。また、自らの住む地域との関わりとともに捉えることで、人々が歴史文化資源をより身近に感じられるようになり、社会全体でそれらを支える気運の高まりに繋がることが期待されます。

## 2. 歴史文化の特徴

本市域は大きく山間部と盆地平野部に分かれ、それぞれに変遷や自然を背景にした産業基盤が異なり、領域意識があるものの、農山村の資源や産業を背景に、在郷町である小荒井地区・小田付地区を中心に発展したことが特徴といえます。

川や盆地等の自然や地理的な特性を背景に形成してきた本市の歴史文化の特徴は、全体を総括するテーマを「飯豊山麓“商いのまち”喜多方の歴史文化」として、次の3つの視点で考えることが出来ます。

1 地理的な視点として 「会津盆地“キタカタ”の出入口」

2 人々の営みの視点として「商いのまち“喜多方”」

3 文化的な視点として 「会津<sup>きたかた</sup>“北方”の信仰とくらし」

### (1) 会津盆地“キタカタ”の出入口

本市は会津盆地北部に位置し、その南端には盆地を北流してきた阿賀川が市域の河川を収束しながら西に向かい、盆地の外で奥会津を貫流してきた只見川と合流し、やがて日本海へとたどり着きます。この阿賀川によって区切られた阿賀川以北の地域が喜多方です。

これらの河川は、水源として稲作をはじめとする農業の発展に役割を果たすほか、「みち」として「もの・ひと・文化」を運んできました。

古くから文化流通の主要な役割を持ち、地域の生活や歴史に果たした役割は大きく、会津の歴史と文化は、陸路とともに阿賀川や只見川等の河川を通して関東・東北・北陸等から産物とともに流入し、流出したと考えられています。

これを裏付けるように、市内慶徳町と阿賀川を挟んで対岸に位置している会津坂下町青津地区は、『日本書紀』に記録される「会津」の名称の発祥地といわれ、ここを基点にして会津盆地北西部地域の半径3kmの狭い範囲に本市所在の熊野神社長床・古屋敷遺跡・灰塚山古墳・会津新宮城跡等の重要な歴史文化資源が集中して所在しています。このことは、古代から中世にかけてこの地域がとても重要な場所であったことを示しています。

また、縄文土器を例に挙げると、北陸等他地域の特色を色濃く示すものや、これらの特色が混ざり合った土器が確認できます。民俗事例では、松山町中村と関柴町下柴に残る彼岸獅子（三匹獅子舞）が、春の彼岸に町を練り歩きます。会津には多くの三匹獅子舞が存在しますが、下柴の三匹獅子は関東から伝えられたという記録があります。山形や新潟には会津から伝えられたという三匹獅子舞があり、伝播を知るうえでも貴重な存在です。

内陸に位置し、海に面していない本市の郷土食の中には、こづゆや鯨の山椒漬、棒たら、えご等、新潟や北海道産の海産物を材料とするものがあり、阿賀川や只見川等を通して会津地方に広がりました。

このように、様々な文化が河川を通じて広まったと考えられ、これらの河川は喜多方地方のみならず会津地方の歴史形成に大きな役割を担いました。

## （２）商いのまち“喜多方”

中世以降、会津の政治の中心は現在の会津若松市周辺に移りますが、そうした時代にあっても喜多方地方は農業をはじめ、木材・炭・木地・漆等の豊富な山林資源の供給地であり、阿賀川を介して日本海と会津を結ぶ交易地の一つでした。また、米沢街道と越後裏街道が接する会津盆地北部の産業・流通の拠点として発展し、特に近世には、会津藩が経済政策の一環として領内の各地に市場を開設し、喜多方でも小荒井と小田付いちに市が立てられたことから、両村は北方を代表する在郷町として栄え、町並みの原型が出来上がりました。酒や味噌・醤油の醸造業や漆器業を中心に商業も発展し、やがて通りに面して「みせ」を構え、様々な用途の土蔵が建ち並ぶ町並みを形成します。

在郷町とは、農村でありながら中心部に商人・職人たちが集まり都市空間を形成したもので、周辺農山村がもたらす米や材木等の資源が町で酒や家材、炭、漆器等の商品となるといった深い結びつきで成り立っていました。さらに、会津藩が定めた半石半永（半分は米、半分はお金）の納税制度により、農民も貨幣を獲得する必要があり、その場所を提供することで商業的活動の活発化とともに町場的性格をより一層強めることになったと考えられます。

また、城下から離れた喜多方地方の商家は、城下の商家よりも地域の自立性が強く、藩の支配下にありながらも独自の文化を形成していき、民力が大きく成長しました。

## （３）会津“きたかた北方”の信仰とくらし

中世以降、支配層の進出とともに、盆地北部には慶徳稻荷神社や示現寺、願成寺等、由緒ある神社や寺院が数多く建立され、喜多方地方は会津地方の宗教文化の中心地の一つとなりました。

また喜多方には、平野部と山地、小雪地と豪雪地といった異なる自然環境による生活習慣なり、生業わい、習慣、伝統行事、衣食住の境目や相交わる部分があります。標高差や自然環境の違いは、当然そこに住む人々の生活にも影響を与えています。会津盆地の平坦な地域にはその地域特有のくらしがあり、同様に、一歩山に入ると木地師や猟師が独自の生活を営むなど、山村には山村特有のくらしがあり、こうした生活と関連して町が形成されてきました。

農業は昔からの基幹産業であり、その発達とともに農耕儀礼も発達し、農業に関する信仰や祭りは今も数多く伝えられています。豊作への祈願は、慶徳稻荷神社の御田植祭や市内に数多く残されている農耕絵馬からも窺い知ることができます。

信仰は、それぞれの地域における「くらしの祈り」でもあり、神棚の恵比寿・大黒や古峯ヶ原詣のように商売繁盛・五穀豊穰・火伏・町内安全等、地域のくらしと密接に関係しています。

また、飯豊山には、五穀豊穰を祈願したり、男子が大人になるために登る成人儀礼の山として、山麓の会津地方はもとより県内外から多くの登拝者で賑わった歴史があります。

祭礼や民俗芸能においても、主に幕末以降の祭りに見られるようになる太鼓台（太鼓屋台）は喜多方の特徴的なものでもあり、その数は30を越え、飾りつけ・構造・囃子等に地域差が見られるのが特色です。

〈全体を総括するテーマ〉

## 飯豊山麓 “商いのまち” 喜多方の歴史文化

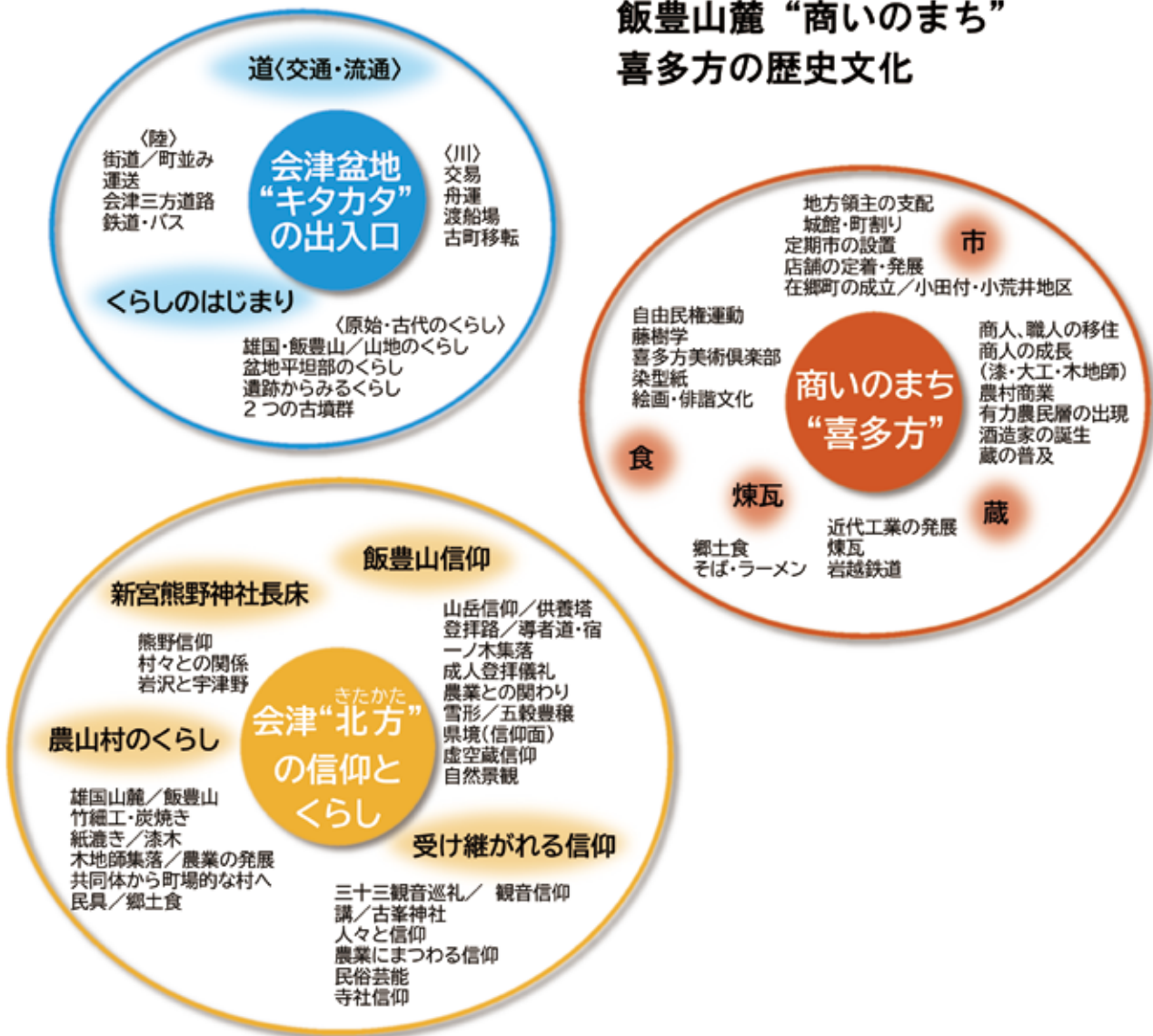


図 3-1 : 喜多方市の3つの歴史文化の特徴

